

sub rosa

吉岡千尋 Chihiro YOSHIOKA

造形芸術学部 非常勤講師

2017年7月7日から8月26日まで大阪市のアートコートギャラリーで筆者が開催した個展「sub rosa」から、これまでの制作を振り返り、その経緯について述べる。

本展覧会では、これまで継続して制作してきたシリーズの中から3つのシリーズを展示した。アルハンブラ宮殿の二姉妹の間（スペイン）の天井を仰ぎ見た記憶と樹木を秋空のもと仰視した際の共鳴を絵画に抽出した「muqarnas」、古典絵画の模写を行い、そこから新たに絵画の表層を紡ぎ出す「mimesis」、展覧会名でもある一輪のバラを描く「sub rosa」の3シリーズである。

これらのシリーズの油彩作品は、描写する前のキャンバスにシルバー下地を施し、モチーフを撮影した写真とキャンバスの両方にグリッドを引き、油彩の筆跡を生かしながら画像を拡大転写したものである。シルバーという物質と光との間にある存在にイメージを投影するように、または染み込ませるように描き、シルバーがもたらす図と地のコントラストをお互いに



1.



2.

割り切れない関係にしながら多重構造にした一つの情景を描く。

このシルバー下地に描く制作には2009年以降、継続して取り組んできた。当初は一色で白黒映画を投影するイメージで描くことから始めたが、油彩の濃度調整やグリッドと筆の大きさによるイメージの捉え方の変化、グリッドという規則性のあるものを用いることで起こる見間違い・描き間違いなどのエラーによる身体性の表出に気づいた。そして、一色で描いた

「beach」、「march」、「なみのりアルバ」（2009年-）以降、「muqarnas」では暖色と寒色、透明色と不透明色を意識するようになった。その後「sub rosa」のシリーズでは、シルバー下地に置かれる色彩の幅を広げ、よりいっそう図と地の関係を複雑にしながら、記憶に残る情景に出会う前後の落差にも似た作品を描こうとした。

さて、展覧会タイトルにした「sub rosa」はラテン語で「薔薇の下で」を意味し、「秘密に、内密に」の暗喩として用いられてきた。古代ローマからの習慣では、バラの絵は守秘を誓う会議室などに飾られてきた



3.

という。筆者はバラを描きながらその実はバラの周辺を描いている気がする。蕾から広がる柔らかな花びらは、一体に芳香を放って土の中まで染み込み秘密の空間を生んでいるように感じるからだ。さらに、「sub rosa」の暗喩からさかのぼると、沈黙の神ハルポクラテスにバラが贈られたというギリシャ神話に繋がる。ところで、絵は言葉にせず見せることで伝える媒体であるといえる。何気なく描き始めたバラが絵と共通するように、沈黙のイメージをもっていることは興味深い。

1. muqarnas 9 油彩, 金属粉, キャンバス 162.3x162.3cm 2015
2. mimesis VI-fresco 糸, 蜜蝋, 顔料, 漆喰, 木 117.8x81.5cm 2017 (左)
mimesis VI 油彩, 金属粉, キャンバス 116.8x80.5cm 2017 (右)
3. SUB ROSA 油彩, 金属粉, 白亜地, キャンバス 194x162cm 2016 (左)
SUB ROSA 2 油彩, 金属粉, 白亜地, キャンバス 227.5x182cm 2017 (右)

© 吉岡千尋 (Chihiro Yoshioka)
撮影: 表 恒匡 (Nobutada Omote)
提供: アートコートギャラリー (ARTCOURT Gallery)